

小磯 明著

『地域と高齢者の医療福祉』

評者：朝倉 美江

1 超高齢社会における高齢者問題と本書の位置

今日の医療福祉は、目を覆うくらい悲惨な状況になりつつある。療養病床の減少、特別養護老人ホームへの待機者の増加、介護保険の要介護認定見直しによる「非該当」の増加、後期高齢者医療制度の開始、国民健康保険滞納世帯の増加など、医療・福祉サービスの利用が困難な状況が拡大している。今や医療難民、介護難民という言葉は、多くの人々に認知されるようになってきている。

超高齢社会を象徴すると言われる2025年には、高齢化率は28.7%、老年人口指数は48.0%となり、私たちは生産年齢人口（15～64歳）2人で高齢者人口（65歳以上）1人を支える社会に当面しているのである。なかでも後期高齢者である75歳以上高齢者は、現在の1.6倍の2,167万人にもなると予測され、それは医療・介護ニーズが急増することを示している。つまり医療、福祉の問題は、今後は全ての人々にとって何らかの形で当面する自分たちの問題となることを示している。それとともに生産年齢人口の減少は、医療福祉サービスを担う人材不足にもつながり、人材不足はサービス量の不足であるとともにその質の低下につながる重要な課題である。

本書は、私たち誰もが当面する高齢者問題の深刻化を見据え、高齢者の医療福祉政策の現状と課題をサービス利用者の実態調査も含め、実証的に明らかにしている。そのうえで医療福祉問題を解決することを目的とし、医療と福祉を統合した医療福祉政策を地域政策的視点から提示することを目指した意欲的な著作である。

2 本書の概要と研究方法

著者は、地方での医師不足、地域医療の崩壊が顕在化するなかで、その課題をいかに解決することができるのかという明確な問題意識をもって研究をすすめている。本書の構成は、序章で地域と高齢者の医療福祉の研究課題を示し、第1章では、地域と高齢者の医療福祉の研究方法を明らかにしている。そして第2章では、高齢者医療福祉政策の歴史と現状を紹介し、そのうえで政府の高齢者政策の限界を指摘し、地域と高齢者の医療福祉研究のレビューを行っている。第3章では、地域と高齢者の医療福祉の課題を明確にし、そのうえで本書の調査対象の一つである首都圏である関東地方に居住する高齢者の生活と医療福祉の構造を分析している。第4章では、もう一つの調査対象地域である中山間地域の高齢者の生活と医療福祉政策と地域の諸問題について分析を行っている。第5章では、過疎山村限界集落である長野県泰阜村の在宅福祉の状況と泰阜村に居住する高齢者の生活実態から医療福祉の課題を明らかにしている。第6章では、調査結果等を踏まえて地域と高齢者の医療福祉政策の検討課題を示している。そして終章では、本研究の意義、課題と展望を論じ、最後に資料編として医療福祉政策の歴史と高齢者の生活状態の分析をしたデータを紹介している。

本書の研究方法の特徴は以下のとおりである。医療福祉政策を研究するにあたって、地域

社会一般ではなく、都市と農村、さらにはそれぞれの地域の特性に応じた政策が必要であることから首都圏関東地方と中部地方の中山間地域を調査研究対象として設定している。さらに医療と福祉という連携が必要不可欠であると従来から指摘されながらも行政サービスに基づいて縦割りに論じられがちであるものを「医療福祉」として統合した一つの概念として設定している。そのうえで「医療福祉」として統合している先進事例を分析し、その重要性を明らかにしようとしたものである。

次に医療福祉の現状と研究については、戦後の高齢者医療福祉政策の特徴を明らかにしたうえで、政府の高齢者政策は、高齢者の生活の場である地域社会のあり様に大きく規定されることから全国一律の政策の限界を指摘している。具体的には高齢者の尊厳を支えるケアを都市部と農村部でどのように確立するのかを明確にすることが求められるという。さらに農山村の高齢者介護の問題は、農業の問題でもあり、地方自治の問題であるとの指摘は的確であると思われる。また都市部でも農村部でも在宅福祉の整備は不十分であることは共通しているが、その問題は過疎地域でより深刻であることから著者の研究はより農村地域を重視したものになっている。

3 本書によって明らかになった高齢者の医療福祉の課題

首都圏における高齢者の医療福祉の調査結果からは、①比較的家族同居世帯が多く、いまだに家族介護が主流となっていることから、現状ではなんとか高齢者の介護は家族介護で成り立っている状態である。②介護保険利用の増大は在宅サービス利用者の増大となっており、今後より一層在宅への政策誘導が行われてくることは確実である。③団塊世代の高齢者の動向を

把握することが課題である、ことを明らかにした。

また中山間地域の高齢者の医療福祉の調査結果からは、①社会資源が不十分ななかで、要介護高齢者を抱える家族の介護負担が大きくなっている。②高齢者の移動の問題から、訪問系のサービスの充実が不可欠である。③都道府県は、地域全体のケア整備計画を立てるべきである、ことを明らかにしている。

さらに中山間地域のなかでも過疎山村限界集落の高齢者の医療福祉の事例として長野県泰阜村を対象に調査を行っている。その結果からは、①拡大する限界集落に対しての政策が必要である、②生きがいがあるような地域での雇用の場づくりが求められている、③終末期のあり方をどうするか、という議論が必要である、ことが明らかになっている。ここで、著者はわが国には在宅死にこだわる医師がどれだけいるのであろうか、という疑問を改めて呈している。そして在宅で最期を迎える高齢者を支援するには、医師の存在と終末期の考え方が最も重要であることを強く主張している。

以上のように本書では高齢者の医療福祉の実態を首都圏、中山間地域を対象に高齢者本人もしくはその家族というサービス利用者への聞き取り調査という方法で実証的に明らかにしている。その一人ひとりの声をいかに構造化し、普遍化することができるかが、筆者の大きな課題であったと思われる。その点についても厳密に調査方法、調査枠組みが検討され、丁寧に行われている。

そのような調査研究によって得られた結論を以下の3点にまとめている。①いまだ未成熟な介護の社会化の推進、とりわけ中山間地域の施策の充実が必要であること、②人口の少ない地域での民間資本の参入は考えられないことから、地域福祉計画にもとづくまちづくり、むらづくりの視点からのアプローチが重要であるこ

と、③現在厚生労働省が進めている在宅介護への全面的な移行は不可能である可能性が高いことから、自宅と施設を必要に応じて行き来できるサービスの総合的提供の必要性があること、である。

4 医療福祉政策史と高齢者の実態をリアルに示す資料編

本書には資料編として、①医療提供の機能分化と連携を中心とした保健と医療・福祉の連携の促進等改革をめぐる経緯、②首都圏の介護保険サービス利用高齢者の生活状態分析、③中部地方（中山間地域）の介護保険サービス利用高齢者の生活状態分析、④長野県過疎山村限界集落の高齢者の生活状態分析が掲載されている。①については、1937年から2006年までの保健・医療・福祉制度の経緯がその連携を軸として、丁寧にまとめられており、貴重な資料となっている。

②、③は首都圏と中部地方の介護保険サービス利用者の生活実態が詳細なデータによって示され、医療福祉の連携として創設された介護保険サービスがその生活をどこまで支えているのかを具体的に示している。家族の介護負担の大きさやサービスの不足、その質の問題などがリアルに表記され、介護保険サービスが早期に改善・改革される必要があることが切実に伝わってくる資料となっている。また④は、②、③と同様の枠組みで限界集落の高齢者の生活実態を明らかにしたデータである。このデータのなかに「今大地震があったら、都会のみんなは田舎の在所めざしていかなくっちゃなくなるだろう—中略—私は、東京、大阪、名古屋だけでどうぞやってください、とっている。そうしたらまず水がストップする。田舎は都会のお荷物だと小泉首相はいったが、終戦高度経済成長時代は田舎が都会を支えたことをまったく忘れ

ている」という声があった。この声は、過疎化しつつある農山村と都市部との関係性を鋭く問いただしており、今日の過疎地域の厳しい状況は、高度経済成長以降つくりだされたものであることを指摘している。泰阜村が担ってきた林業、さらに農業、漁業など地域の生産の衰退は地域の生活基盤の脆弱化とつながっていることから生活基盤を再生するためには地域の産業や雇用問題を医療福祉問題とともに解決することが不可欠となっている。つまり著者が指摘しているとおり医療福祉の課題の解決は、地域づくりと連動させない限り不可能であろう。さらにデータの意見が指摘するように歴史的な経緯や持続的な環境問題なども含めて総合的な地域づくり政策が必要不可欠であると思われる。

5 本書の課題と今後への期待

本書の課題については、著者自身も明示されているが、その点に加え、いくつか今後の研究への期待を含めて述べるならば、まずは、本書では、ひとつの事例を客観化、普遍化することに関心が高かっただけに一人のニーズが細分化され、政策、サービスに対応するものとなりがちであったこと。次には、ニーズを把握するうえで家族と要介護高齢者のニーズについてはより厳密に分けて考える必要があるのではないかと、ということ。3点目は地域を基盤とした医療福祉政策を論じるにあたって、医療福祉を生活の共同や地域づくりという枠組みで、より地域社会に焦点をあてた分析・考察が不可欠ではないと思われること、がある。いずれも筆者の問題関心である高齢者のケアを統合的に支えるという視点からは、生活を総合的に、さらに生産（主に農業）と生活を連続的にとらえ、地域づくりという視点で深められるのではないかとと思われる。

本書は、一貫して利用者の視点に立ち、さら

に今日の医療福祉政策が在宅へと大きく推進されているなかで、もっともその実現が困難と思われる中山間地域のなかでも過疎地域に焦点をあてて、実証的に論じられていることは大きな意味があると思われる。人口減少化が急速に進展し、過疎化は農村部だけではなく、首都圏においても孤独死の増大など共通する課題として当面しているが、本書はその解決の糸口を明確に示している。ぜひ多くの方にご一読いただき、今後の私たちの地域ごとの医療福祉政策を考えるきっかけとしていただきたいと強く願うものである。

さらに本書のテーマに関連して2002年の国連の高齢者世界会議でのアナン国連事務総長の演説を思い出した。アナン氏は、世界的な高齢化の急速な進展への危機感のもとに「各国政府が高齢者に対して第一次的な責任をもつ一方で、すべての活動領域が効果的な連携によって活動する必要がある。そしてあなた方も世界に向けて高齢者は別の範疇の人々ではないというメッセージを広く送ってほしい。われわれも、すべて、いつかは老いるのだから—幸運であれば」

という演説をしたが、高齢者問題は国際的に共通する私たちの未来の問題であり、著者が強調してきた国、都道府県、自治体の政策が重要であるとともに連携が求められる最重要課題の一つである。

また、本書出版後、政権交代が実現し、2002年以降推進されてきた「構造改革」が転換されたが、本書が願った方向に私たちの国は進むのであろうか。鳩山首相の所信表明演説では、遊説の際、青森県で息子が職に就けず、自らのちを絶ったというおばあさんと出会ったことが紹介され、その手の感触、その目の中の悲しみを忘れることができないし、断じて忘れてはならないとし、「政治は弱者のためにある」との言葉が述べられた。いのちと生活を守る政治が本当に実現されるためにも本書が提起している医療福祉と地域づくりが連動する政策が実現することを願わずにはいられない。

(小磯明著『地域と高齢者の医療福祉』御茶の水書房、2009年1月、vi+312頁、定価4,600円+税)

(あさくら・みえ 金城学院大学現代文化学部教授)

シリーズ・新しい社会政策の課題と挑戦

【全3巻】

●A5判・平均276頁・各3,465円

1 社会的排除／包摂と社会政策

福原宏幸 編著

ヨーロッパ諸国の社会的排除概念の発展と政策への影響を概観。ホームレス、母子世帯、不安定雇用の若者など日本の実態と実践を紹介。

2 ワークフェア ◎排除から包摂へ?

埋橋孝文 編著

先進諸国が採用したワークフェア登場の背景や特徴、波及的効果を分析、検証。ワーキング・プアや就業困難者の事例から課題を論じる。

3 シティズンシップとベーシック・インカムの可能性

武川正吾 編著

市民権をめぐる動向をふまえ、社会政策・経済学・法学・政治学の立場から整理。財源を提示し、年金や児童手当を素材にBIの可能性を探る。

法律文化社

京都市北区上賀茂岩ヶ垣内町71
TEL 075(791)7131
http://www.hou-bun.co.jp/
●価格は定価(税込)